

R. A. Herrea, *Anselm's Proslogion: An Introduction.*

Washington D. C., University Press of America, 1979, x+151 p.

矢 内 義 顕

アンセルムスのいわゆる「存在論的証明」に関してはこれまでも数多くの論文が発表されてきた。けれども『プロスロギオン』そのものに関するまとまった一書となると、その数は極めて少ないであろう。

著者 R. A. Herrea (Seton Hall univ., South Orange, N. J.) はこれまでも *Analecta Anselmiana* (以上 AA と略す) を始めとしてアンセルムスに関する論文を幾つか発表している。主なものを挙げると、1. St. Anselm: A radical empiricist? (AA Bd. 2, 45ff), 2. St. Anselm's *Proslogion*: A hermeneutical task. (AA Bd. 3. 214ff. 同論文は *American Catholic Philosophical Proceedings Association* 44. 1970, 214ff にも掲載), 3. The foolish of the *de utilitate credendi*: A parallel to Anselm's insipiens. (AA Bd. 5. 133ff) 等がある。これらは、いずれも本書執筆の基礎作業となっている。

さて、本書の意図は、「『プロスロギオン』をアンセルムスの思索と文化の脈絡の中で検討することにより、これを時代の破壊と解釈者の略奪とから救い出そうとする穏当な試み」(p. iii および p. 37, 142) である。

構成は、序論の後八章に分けられる。Ⅰ. アウグスティヌスの背景。Ⅱ. 『プロスロギオン』の証明。Ⅲ. 信仰と理性。Ⅳ. 必然的諸根拠。Ⅴ. グノーシスとしての『プロスロギオン』。Ⅵ. 中世と近代の批評。Ⅶ. 現代の再陳述。Ⅷ. 現代の批

評。さらに結論、文献と続く。著者はⅡで『プロスロギオン』全体を概観した後に、Ⅲ～Ⅴで信仰と理性という視点から『プロスロギオン』を検討する。Ⅵ～Ⅷでは中世から現代に至るまで寄せられた「存在論的証明」に関する様々な批評が紹介され、さらにそれらに対する著者の批評が加えられる。取り上げられるのは、Ⅵ. ガウニロ、トマス・アキナス、ドンス・スコトゥス、デカルト、カント、Ⅶ. Allshouse, Hartshorne Ⅷ. Moreau, McGill, R. Taylor, G. Ryle, Alston, N. Malcolm, Henle, J. Hopkins である。これは、「存在論的証明」をめぐる論争史を知る上でも有益であろう。

以上、本書の概略を述べた上で、次にⅢ～Ⅴを中心にその内容を紹介したいと思う。

周知の通り『プロスロギオン』の最初の標題は「理解を求める信仰」(Fides quaerens intellectum)であった。それゆえ、信仰と理性との関係について検討することは不可欠であろう。著者はⅢにおいて、『言の受肉に関する書簡』、『自由選択と予知、予定および神の恩寵の調和について』、『神はなぜ人間となられたか』を取り上げてこの問題を論ずる。ここで理性は信仰の領域内と領域外とで考察される。すなわち信仰に先立つ知と信仰に続く理解である。前者は『プロスロギオン』における「愚かなる者」(insipiens)の立場、後者はアンセルムスの立場を示す。信仰に先立つ知は、信仰を生み出すものではないが、その必須条件としての役割は持っている。何も知らない事柄を信ずることは不可能だからである。けれども、人間の理性は原罪によって汚れ、脆弱なものとなっているために、それ自体では本来の能力を発揮できない。それゆえ理性の浄化が必要となる。理性の浄化という考え方そのものはプラトニズムの中にも見い出される。しかしこの作用を神の賜物とする点に、殉教者ユスティノス——アウグスティヌス——アンセルムスと異教哲学との相違がある。神に背いた意志に正直(rectitudo)が付加されること、すなわち、キリストの受肉と贖罪とによって人間性が回復されて初めて、理性は正しく神を理解し、さらに信仰によって自らの能力を超越した目標、神の至福直観へと向うのである。信仰と理性とはこの一つの過程が持つ二つの側面であって、異なる過程に属するのではない。

著者は以上の議論と共に、「愚かなる者」が何ゆえ『プロスロギオン』第Ⅳ章を

境に舞台から去るのかという謎を解こうとする。「愚かなる者」は依然として「愚かなる者」であったのか、論証の上ではアンセルムスに承服したのか、それとも信仰を持つに至ったのか、テキストは沈黙する。「愚かなる者」の知は、既に述べたように、信仰に先立つものであり、それがより深い理解、さらに至福直観に至るためには、神の介入を必要とする。それゆえ彼の行方は、人間の関知するところではなくなるのである。

Ⅳにおいて著者はアンセルムスの「必然的諸根拠」(rationes necessariae)の意味を吟味する。この語は、アンセルムスにおいて厳密な意味を持つものと、比較的ゆるい意味を持つものとがあるとされる。信仰的基盤の薄弱なところでは「必然的諸根拠」は強固となり、信仰的基盤の強いところでは「必然的諸根拠」はゆるいものとなる。したがってこれはあらかじめ受け入れられた信仰的真理をもとにして、その内包から導出されてくるものであるが、さらにより深い根拠へと進展していく可能性を持つがゆえに、絶対的に確実なものではない。

この語と並んで「適合性による論証」(convenientia)が吟味される。これは「必然的諸根拠」に基礎を持つものではあるが、場合によってはその逆の過程をとり、「適合性による論証」が「必然的諸根拠」となることもある。

さて、『プロスロギオン』においては、神の存在を否定する「愚かなる者」とアンセルムスとの間にはいかなる信仰的共通の基盤も存在しない以上、論証は最も厳格なものとならざるをえない。『プロスロギオン』において論証の厳格性が薄れ、「適合性による論証」が入り混じってくるのは第Ⅶ章以上である。この論証の厳格さが要求されるどころ、つまりアンセルムスが「愚かなる者」との唯一の共通基盤としたもの、それが「それより偉大なものが何も考えられ得ない何か」(aliquid quo nihil maius cogitari possit)という「神の記述」(a description of God)である。これは、アンセルムスにとっては信仰より生じたものであるが、同時に「愚かなる者」にとっても理解可能なものだからである。「愚かなる者」が愚かであるゆえんは、この記述が表示する事柄(res)の理解へと進まず、voxの段階に留まっていることにある。一度この記述が受け入れられると、論証は、知性的存在から実在へ(第Ⅱ章)、実在から必然的存在へ(第Ⅲ章)、そして表現を絶した存在へ(第Ⅳ章)と展開する。この論証の原動力となっているのは矛盾律である。第Ⅱ章と第Ⅲ章と

は各々独立した論証ではなく、偶然的存在から必然的存在へと至る一つの論証である。

概念と実在との二分法を越え、神を考えるときに、まさにそれが必然的に存在すると考える人間の思惟が持つ力動性、これこそアンセルムスが発見した領域なのである。

以上、アンセルムスにおける信仰と理性、「必然的諸根拠」、「存在論的証明」に関する著者の見解を追ってきたのであるが、それでは、論証と瞑想（祈祷）の両者から成り立つ『プロスロギオン』一書を全体として性格づけるとするならば、何とすることができよう。著者はⅦでこの問題を扱う。

E. ジルソンは『プロスロギオン』の独特な性格を、アレクサンドリアのクレモンスにおけるキリスト教的グノーシス主義に比した。著者も、異論が生ずることは認めつつ、このジルソン説に従い、神秘神学的観点からとらえようとするA. シュトルツとは一線を画する。ここで著者が用いるグノーシスとは、「実在、真理、正義の源泉が自己自身を存在として開示する思惟の内における折り」(p. v) という意味である。

ところで『プロスロギオン』は「努めて神の瞑想に (ad contemplandum deum) 精神を傾け、信仰の理解を求める者の立場から」著された書である。著者はそこで *contemplatio* という語に注目する。*theoria-contemplatio* は古典的にはアリストテレスの言う *scientia veritatis* である。アンセルムスはこの古典的伝統を継承しつつ、これをさらに実践的秩序の中に組み込んだと著者は主張する。このことは、アンセルムスの理性概念についてもあてはめられる。すなわち、アンセルムスにとって理性は本来善と悪とを判断する実践的性格を持つ能力である。したがって神の探求は論証のみに限られるのではなく、『プロスロギオン』第Ⅳ章以降にあらわれるごとく、体験をも含むものである。そしてこの体験はこの世においてではなく、かの世における至福直観において完成されるのである。思索と祈祷とはこの至福直観に至る一つの活動に他ならない。思弁的スコラ学と体験的修道院神学の両者の要素を合わせ持つ『プロスロギオン』の独特な性格を、著者はグノーシスという語で位置づけようとしたのである。

以上、本書のⅢ～Ⅶを中心にその内容を紹介したのであるが、著者自身も指摘す

るように、『プロスロギオン』は未だ terra incognita に留まっている。それは、この書で提起された問題こそ、パルメデス以来人間の思索が取り組んできたもの、思惟と存在の問題であるからに他ならない。著者はそれを「アンセルムスの思索と文化の脈絡の中」でなんとか明らかにしようとする。この試みは正当であろうし、それによって本書は『プロスロギオン』のみならず、その他の作品、アンセルムスの思想の持つアウグスティヌス的伝統、彼の属する文化についても有益な入門となっている。最後になったが、誤字、脱字が非常に多いのは残念なことである。

上智大学中世思想研究所編集
古代キリスト教の教育思想：教育思想史Ⅱ

昭和59年，東洋館出版社，462頁。

宮本久雄

本書は、教育思想史四巻中の第二巻を占め、旧・新約教育思想からギリシア・ラテン教父教育思想までを包括する豊饒にして多彩な論文集である。しかもこの種の著作としては日本で最初の労作であり、執筆者も現代日本の学的最前線で活躍しておられる顔ぶればかりであり、従って本書の古典思想研究の水準は単なる『教育思想史』の枠を突破した神学的香りの高いものになっていると言えるであろう。本書の意図を示すと思われる序言においても「今日、教育はその意味を根底から問い直されている」（1頁）と訴えられ、従って問いは「人間とは本来何なのか、自由な決断を通して人間は何になり得るのか、また、真の善に照らして何であるべきなのか」（同）という哲学・神学の中心的課題をめぐるものとされているのである。

実際に「古代キリスト教の教育思想」が対決し、思索のよき土壌としたギリシア哲学並びに旧約的思想において教育への問いは世界と人間の根拠への問いそのものであったとさえいえるであろう。ギリシア哲学はその教養の理想（*enkyklios paideia*）の背後に善のアイデアへの人間の帰郷という問いを人間の思索の歴史に提示して